

青橋商店
AOHASHI GO NOVELS

背徳のエルフ
母娘

アイシヤ & マリナ

成人向け
ADULT ONLY

青橋由高
安藤智也
illustration

Story

王国の至宝とも謳われる美貌のエルフ王妃アイシャ。

その母の若い頃と瓜二つの第一王女マリナ。

だが、その美しさと高貴さゆえに、想いを歪ませた人間の魔術師
ギユネイによって母娘は穢される。

アイシャは夫しか知らなかった女体に望まぬ悦楽を教えられ、
マリナは純潔を散らされた上、妹の見ている前で背徳のアナル絶頂まで
晒してしまう。

そんな憐れな二人を、ギユネイの新たな罠が待ち受ける。

「イヤッ、そんなところに潜り込まないで……ひいいっ！」

「ダメ、ダメ、娘の前でこんな仕打ち、非道すぎるわ！」

卑猥な性質を付与されたスライムによる強制アクメ。

母に見られながら排泄器官を觸られ、達するという恥辱の極み。

娘の前でもう一つの処女を奪われたというのに、乱れてしまう母の哀しみ。

「お母様、わたくし、もう、もう……！」

「堪えてマリナ、でないと私まで……アアッ」

美しきエルフの母娘を待ち受ける淫猥な運命は、まだ終わらない。



「アイシャ&マリナ 背徳のエルフ母娘」

安藤智也（イラスト）
青橋由高（著）
あおはしゆたか
あんどうともや

目次

プロローグ

5

第一章

9

第二章

43

第三章

95

エピローグ

118

あとがき

122

電子版あとがき

126

「そうだギユネイ、先日話していた新しい魔法の件だが、あればどうなったのだ？」
エルフ王国の英雄王レオンが人間の軍師ギユネイにそう尋ねたのは、退屈な定例会議が終わった直後のことだった。

自分たちの王が人間に話しかけるのを、他の臣下たちは忌々しげな顔で見ている。彼らエルフの多くにとって人間は劣等種であり、忌み嫌うべき存在だからだ。

もちろん、レオンの戦友として輝かしい経歴を持ち、国の重職として数々の成果を上げたギユネイを認める者も存在するし、少しずつ増えつつもあった。最近、ギユネイの助手となったコザックもその一人だ。

そのコザックは、ギユネイの斜め後方から、レオンに憧れのまなざしを注いでいる。「ああ、魔物を使役する魔法ですね。レオン王のご尽力のおかげで、いくつかは実用化の目処が立ちました。もっとも、現状では下級の魔物しか制御できませんので、戦闘に投入するにはまだまだ研究の余地がありますね」

下級貴族であるコザックにとっては、王から直接話しかけられるだけでも飛び上がるほどの事態だ。それなのに、ギユネイは平然とレオンと会話をする。己の雇い主で

ある人間の魔術師を見つめるまなざしに、畏敬の念すら感じられた。

「魔物を使役、だと……？」

「なんとおぞましい術を考えるのだ。これだから人間は……！」

「いや、レオン様のことだ、きっと深いお考えがあるのだろう」

ギユネイを快く思っていない臣下たちの声が聞こえてくるが、当の本人は右から左に受け流す。そもそも、相手をする価値もないと見下しているからだ。コザックには、そんなギユネイの態度がクールに見えるらしい。

（この青年はなにか勘違いしてるようですが、まあ、信頼させておいて損はないですか。いずれ利用できるかもしれませんし）

ミス姫の純潔を奪った大罪について赦す気など毛頭ないが、コザックの心の優先順位が他に移った現状、わざわざ波風を立てるつもりもなかった。

「そうか。もし、魔物を使役できれば、いざというときに大きな戦力になる。我らエルフは長寿な分、どうしても未来への対策を後回しにする傾向がある。危機感の欠如は、種族としての欠点だな」

ギユネイなどの他種族とパーティーを組み、様々な冒険をクリアしてきたレオンはエルフ族の将来を憂うが、狭い世界で生きてきた臣下たちにはなかなか真意が伝わってないようだ。

（レオン王はこの先、数百年は苦勞しそうですね。その頃には私はとくに死んでますから、どうでもいいといえはいいのですが）

王妃アイシャに心酔するギュネイにとって、レオンは間違いなく恋敵である。けれど、戦友であり、主君であるのもまた事実だ。

この美しき英雄王に対する感情は、ギュネイ本人もうまく言語化できないでいる。

「そこを補うのが、短命で醜い、憐れな人間種である私の役目でございます」

「……そういう言い方はやめたほうがいいな、我が戦友よ」

王ではなく、かつての仲間の顔で言われ、魔術師の心がざわつく。

（このお方は、無自覚だから困る……）

鍛え上げられた肩を小さくすくめ、軍師として報告を続ける。

「戦力として魔物を使役するはまだ時間がかかりますが、別の目的でしたら、技術は完成しております。もしよろしければ、レオン王自ら体験してみますか？」

「実用化の目処が立った、と先程言ったやつだな。ふむ、面白そうだ。どのような魔法なのだ？」

乗り気のレオンを見て、臣下たちが目を見開く。

「おやめください王！」

「怪しげな術に大切な御身を預けるなど、もってのほかでございます！」

「ギュネイ、貴様、レオン王に対して不敬であるぞ！」

これもいつものことなので、ギュネイも、そしてレオンも耳を貸さない。

「ご安心ください、レオン王。すでに我が身や信頼できる助手たちで術の安全性は証明済みでございます。万が一、問題があったならば、その場で私の命を絶ってくださいませんか」

助手とは、人妻エルフのナインと、コザックのことだ。

「ほう？ そうなのか、我が軍師の助手よ」

「は、はいっ、ギュネイ様の魔法は素晴らしいものでした、王っ」

王に問われたコザックが、緊張で声を上擦らせながら頷く。

「よし、ギュネイ。早速その新魔法、試させてもらおうか」

新しいものが好きな英雄王の言葉に、ギュネイは「御意」と深々と腰を折る。

漆黒のローブを纏った魔術師の口元に浮かぶ邪悪な笑みに気づく者は、この場には誰もいなかった。

第一章

エルフ王国の宝石と称される美貌の王妃アイシャは、城の廊下を一人、物憂げな表情で歩いていた。

月明かりに銀髪を輝かせたその姿は、神々しさすら漂わせる。だが、白い肌はどこか妖しく赤らみ、形よい唇から時折漏れる吐息も、妙な生々しさがあった。

（まさか、こんな時間にあんな男の部屋に行くことになるなんて。レオンったら、ギユネイを信用しすぎだわ）

アイシャが向かってるのは、軍師ギユネイの城内研究室だ。

（ギユネイのことだもの、なにか邪悪な企みがあるに決まってるわ。油断だけは絶対にしたらダメよ、私……！）

アイシャにギユネイの部屋に行くよう告げたのは、彼女の夫であるレオンだ。命令ではなく、あくまでもレオン個人の「善意」から出た推奨の言葉だった。

だが、アイシャにはわかる。わかってしまう。夫にそう仕向けさせたのが、黒衣の魔術師であることが。なぜならば、アイシャはすでにギユネイの姦計に陥った経験を持っているからだ。

（あの人は、ギユネイの新しい魔法がとにかく凄いい、素晴らしいって繰り返してた。でも、詳しいことはなにも教えてくれなかった。きっと、口止めされてるんだわ）

ギユネイの魔法が、健康促進に関するものkまでは予測できた。レオンの肌艶が、一目見ただけでわかるほどによくなくなっていたからだ。

ギユネイがそういった方面の魔法にも長けてるのはアイシャも理解している。けれど、あの魔術師が長けてるのはもっと別の、もっと邪悪な方面なのだ。その犠牲となったアイシャは、誰よりもそれを知る人物だった。

もっとも、自分の可愛い二人の娘たちがギユネイの毒牙にかかったことまではまだ知らない。知っていたならば、いくらレオンの勧めがあったとはいえ、このような時間、一人でギユネイの部屋になど行かなかっただろう。

（もしも、あの男が私に不遜な行為をしようとしたら、絶対に拒まなければ。これ以上愛する人を、家族を裏切れない……）

アイシャは自らに言い聞かせるように胸の中で繰り返す。そうしなければ、また流されてしまうという恐怖があるからだ。

（それに、最近のギユネイは全然私に顔を見せようともしないわ。一時は、いくら私が避けてもあれこれ小細工してきたくせに。……最後に私に乱暴してから、もう何日経ったと思ってるのかしら）

目的地であるギュネイの研究室が見えてきたところで、アイシャはいったん足を止める。そして胸の前で手を組み、己の決意を確認するために目を閉じ、深く、長く息を吐く。

（そう、私は王妃。英雄王レオンの妻で、我が国の王妃なのよ。卑劣な人間には絶対に屈しない……!）

毅然とした表情を浮かべるアイシャは、けれど、まだ気づいていない。自身の白い肌がうっすら紅潮してることも、エメラルド色の瞳が艶めかしく潤んでいることも。そしてこの苛立ちの原因が、ただ拗ねているだけだということにも。

控え目なノックにドアを開けたギュネイは、すぐ目の前に立つアイシャの姿を見て息を呑んだ。卑劣な畏にかけて数え切れないほど凌辱しても、こうしてアイシャを前にすると、いまだにギュネイの心は子供の頃のように高鳴ってしまう。

「これはこれはアイシャ様、このような場所までわざわざご足労いただき、まことにありがとうございます」

ギュネイは恭しく頭を下げると、ドアを支え、腕を部屋の奥に伸ばして王妃に入室を促す。

「……」

あるいは拒まれるかも、と予想していたが、アイシャはギュネイを睨みつけただけで、素直に足を踏み入れてくれた。

「部屋には鍵をかけませんので、ご安心を。もし、お気に召さないことがありましたら、そのときはすぐにここから逃げてください」

「あなたには、女一人を閉じ込める方法など、いくらでもあるのではなくって？　どうせ、すでに私とは別の女を引き入れてたのでしょうか？」

「誤解でございます、アイシャ様」

「だったら、どうしてこんなに長いあいだ、私を放っておいたのです？……い、いえ、私としてはそのほうがありがたいのですけれど」

慌てて言い繕うアイシャの反応に、ギュネイは唇の半分だけを持ち上げて笑う。

「こちらへどうぞ、アイシャ様」

アイシャの動揺に気づかなかったふりをして、研究用の部屋に案内する。

「昨夜、レオン王にお使いいただいたときと同じ状態です」

「……っ」

部屋の中央に二つのベッドが並べて設置されているのを見て、アイシャの顔が強張る。かつて、美容のためと称してギュネイにされた淫靡な畏を想起したのかもしれない

い。

「レオン王から、魔法についての説明は聞かされましたか？」

「いいえ。あの人はなにも。ここに来ればわかると、何度聞いても教えてくれなかったわ。……あなたがそう仕向けたのでしよう、ギユネイ」

あからさまに警戒するエルフの王妃に、ギユネイは苦勞して偽りの笑顔を向ける。

嘘の笑顔を浮かべるのが大変なのではない。憧れの相手から睨まれる法悦に、己の顔がだらしなく緩むのを引き締めることに精一杯だったのだ。

（アイシャ様から向けられる冷たい視線……ふふっ、なんて素晴らしいご褒美なのでしょう。この鋭いまなざしが、私の腕の中で甘く、淫らに蕩ける瞬間を想像するだけで全身の血液が沸騰してしまいそうですよ）

早くも勃起し始めた股間をローブで隠しつつ、己の研究成果を発表する。

「長寿ゆえに出生率が低いエルフ族にとって、戦闘行為で戦死者を出すのは国の維持を考える上でも、非常な痛手となります。そこで、魔物を兵士として使役しよう、というのが研究の発端でした」

恋い焦がれる女性の前で自分の手柄を話すことに、ギユネイはまるで子供みたいに興奮していた。ギユネイが強力な魔術師に成長できたのも、元はと言えば、アイシャに近づきたい一心からだった。

「ええ、そこまでは私も聞いてます。その研究の成果がどうして、レオンや私に役立つようなものになったのです？」

「アイシャ様は下等な魔物と聞いて、まずなにを想像されますか？」

「今、私の目の前にいる生物は、相当に下劣じゃないかしら？」

「ふふふ、これは手厳しい。確かに私は下劣かつ下等ですが、品性ではなく、生物学的な意味で、でございます」

アイシャなりの精一杯の皮肉なのだろうが、王妃に対する歪んだ想いを抱くギユネイにとって、罵られるのは飲びに等しい。

「下等な生物……魔物………スライムとか、かしら」

「さすがアイシャ様、正解でございます！ このギユネイ、王妃の慧眼に感服いたしました」

「おやめなさい、わざとらしい。……ス、スライム？ まさか」

「はい、現状、完全に魔法の制御下におけるのはスライムだけなのです」

高位の魔術師にとって、魔物をコントロールすることはそう難しくない。だが、兵士として利用するには、魔術師以外でも制御できなければ実戦での使い勝手が著しく落ちてしまう。魔法が使えない指揮官でも扱えるようにする、という点が技術上のキーポイントだった。

「スライムがいるのですか、ここに!？」

一般的に、スライムは女性から嫌悪されることの多い魔物だ。アイシャも例外ではないらしく、脅えた様子で室内をきょろきょろと見回している。

「ご安心ください。スライムといっても、アイシャ様が今、想像されてるものではありませんので。……スライムと知ればきっと嫌がるだろうと思い、レオン様と相談し、秘密にしていたのです。どうかご容赦を」

夫の名を出すと、少しは警戒心が和らいだようだった。ギュネイとすると、少しばかり複雑な気持ちになる。

「今回アイシャ様に使うのは、この特殊なスライムです。南の地方では古くから王族や貴族たちのあいだで、美容に使われてきた生き物でございます」

そう言ってギュネイが取り出したのは、透明な容器に密閉されたピンク色のスライムだった。瓶を揺らすとスライムもゆっくりと動く。

「それ……生きてるの?」

「はい。ただしこのスライムは動物というよりも、植物に近い生き物です。本能はありますが、思考や意識はありません。だからこそ、完全に制御できるのです」

ギュネイは蓋を開け、手のひらにスライムを垂らす。

「……気味が悪いわ」

「レオン様もそうおっしゃってました。でも、すぐにこれはいいものだとお褒めの言葉をいただきました。……簡単に説明しますと、このスライムは身体の排泄物を取り除いてくれるのですよ。また、肌の保湿効果もございます」

「そういえば、確かに今日のあの人の肌、凄く綺麗だったわ……」

「元々眉目秀麗なレオン王ですら、たった一度の施術でわかるほどの効果があるので。また、老廃物を吸収するため、疲労回復にも役立ちます」

「……わかったわ。今回はあの人の顔を立てて、実験に協力してあげましょう」

自分の夫が効果を証明したのが決め手となったのか、あるいは別の理由が存在するのか、アイシャが施術を受け入れると表明した。

過去に、ギユネイの美容術を体験し、その効果を知っていたこともアイシャの背中を押したかもしれない。ただし、あの美容術は卑劣な罠でもあったのだが。

「それで、私にどうしろと？ そのベッドに寝ればいいのかしら？」

「はい。しかし、まずはその前にこれに着替えていただきます。せっかくのお召し物になにかあってはいけませんので」

ギユネイが取り出した施術用の服を見て、アイシャがかつと頬を赤くした。

それが怒りや恥ずかしさによるものか、あるいはもっと別の感情によるものかは、ギユネイにはわからない。しかし、アイシャは無言のまま服を受け取る。ギユネイに

は、それだけで充分だった。

すでにこの人妻の肉体は籠絡してある、その確信がギュネイに自信を与えていた。（さて、あとはもう一人のお客様の到着を待つだけですね。そろそろいらっしゃる頃合いのようですが。ナインのことだから、きっちり仕事はしてくれたでしょうし）

エルフ王国第一王女のマリナが、人目を忍ぶようにギュネイの部屋までやって来たのは、彼女の元に一通の密告書が届いたからだ。

『今夜、アイシャ様が軍師ギュネイの部屋を訪れる』

女のものと思われる字で書かれたそれは、マリナが目を通すとすぐ青い炎に包まれて消えてしまった。証拠を残さないために魔法をかけてあったのだろう。

（あんな真似をするのは、ギュネイしかいません。これは畏ですわ）

畏、という言葉から、この部屋で体験したおぞましい記憶が甦る。

血を分けた実の妹ミスと二人で、嫌悪の対象でしかない人間の魔術師に蹂躪されてからまだそう経ってないのだ。

一国の姫が、それも姉妹揃って辱められるなどという醜聞を公にはできない。ギュネイを罰することはできても、ダメージはマリナたちのほうが遥かに大きいため、泣

き寝入りする他はなかった。

また、たとえマリナたちがギュネイの悪行を告発しようとしても、あの用意周到な男が見逃すとも思えないのだ。

（あのあと、ミリスともあまり話せなかったし、こんなこと、他に誰にも相談できません。ああ、わたくしはどうしたら……。お父様、どうかわたくしに力を……。っ）

妹のミリスは、すでにエルフ王国にはいない。地元貴族の結婚式に参列するため、普段居留してる城へと戻ったからだ。

王城を出る際、馬車に乘ろうとしたミリスとギュネイがなにごとか言葉を交わすのを遠目に見たことを不意に思い出す。

いつもと変わらず飄々とした顔の人間に対し、妹は苛立ちを隠さなかった。けれど、その表情には甘えや拗ねといったものも含まれてるように姉であるマリナには感じられたのだ。

（ミリス、あなたはもしかして……）

妹から嫉妬の対象とされた豊かな胸の奥に、小さな疼きが走る。それは、ギュネイが母アイシャについて語るときに感じるものとよく似ていた。

（いいえ、今はお母様のことが先。たとえこれがあの男の卑劣な畏だったとしても、見逃したりできないもの）

母アイシャも、すでにギュネイの魔手にかかっていることは知っている。だからといって、見過ごせるはずもない。ミスもない今、アイシャに助けの手を差し伸べられるのは、娘であり、同性である自分だけだとマリナは思う。

（だけど、もしもお母様が……うん、そんなはずはないわ。だって、お母様にはお父様がいらっしゃるんだから）

マリナを躊躇させてるのは、敵の巣窟に踏み込むことだけでなく、アイシャが実はギュネイに惹かれてるのでは、という懸念だ。

（そうよ、こんなこと考えるなんて、お母様に対して失礼だわ）

マリナはぶるぶると頭を振ると、意を決してギュネイの部屋のドアをノックした。

「これはこれはマリナ様、このような場所にお一人でいらっしゃるとは。なにかありましたか？」

ドアはすぐに開き、黒いローブを纏った禿頭の大男が現れた。わざとらしい言葉に、やはりこの人間は自分が来るのを知っていたのだ、と確信する。

「ここにお母様が来ていると聞いたので、心配になったのです」

下手な小細工をしてもギュネイ相手では敵わないと、ストレートに切り込む。

「なるほど、レオン王からお聞きになったのですね？」

「え？ お、お父様？」

だが、誤魔化すどころか予想外な人物の名を出され、マリナは狼狽える。

「おや、違うのですか？ アイシャ様だけでなく、マリナ様にも今以上に美しくなってもらいたいというレオン様のお気遣いかと思ったのですが」

あの密告書は間違いなくギユネイの差し金だ。つまり、ここでレオンの名を出したのはファザコン王女の動揺を誘う作戦でしかない。

マリナも、それは理解している。しているのだが、愛する父の話題を振られると、無視できない。

「く、詳しく話さない、ギユネイ」

「承知しました、マリナ様。では、中へどうぞ。アイシャ様も今、準備をされてるところでございます」

「……」

こうしてマリナは、姉妹揃って翩られた魔の巣窟へと、再び足を踏み入れたのだった。

「……っ」

ギユネイに通されたのは、普段は魔法の研究に使っているという部屋だった。

怪しげな道具や材料、書物の中、なぜか部屋の中央に並べられた二つのベッドを見て、マリナが息を呑む。妹のミリスとともに晒してしまった痴態が脳裏をよぎり、長い耳が羞恥に熱くなる。

「アイシャ様はまだ用意が終わらないようですね。ちょうどいいので、今のうちにマリナ様にも説明させていただきます」

こちらの動揺に気づいたはずなのに、敢えて無視をするギュネイが憎たらくてたまらない。だが、まずは事情がわからないとどうしようもないので、マリナはぐっと堪え、目でギュネイに先を促す。

「……つまり、スライムを使っての美容法、ということですか？ あのおぞましい魔物といい、ろくでもないことにその才を浪費するのですね、あなたという男は」

魔法で生み出したという触手で責められたアヌスに妖しい疼きを覚えながら、ギュネイを睨みつける。

「あの触手は確かに私の趣味ですが、スライムは違います。王や議会の許可をもらっていますし、昨日はそのレオン様自身もこの美容法をお試しになり、満足されました。ああ、ちょうど、マリナ様の目の前のベッドを使われましたね」

「え……お父様がこのベッドで……？」

「便宜的に美容法と称してはおりますが、健康促進、疲労回復といった効能が期待で

きます。レオン様は王としての激務でお疲れだったのでしょうか、特に効果を感じられたようでございます」

マリナにはレオンの話題を使うのが最も効果的だと知っているギュネイが、次々と興味深いことを語る。

「わ、わかりましたわ。あなたの開発した、スライムを使役する魔法が有益である点は認めましょう。お父様が保証するのならば、信用できます」

「ありがとうございます、マリナ様」

「ですが、あなたのような者とお母様を二人きりにはできません。しかも、こんな遅い時間に」

「時間に関しては、理由がございます。現状、老廃物を吸い取ってくれる特殊なスライムは、夜行性のものしか制御に成功してないのです」

ギュネイはそう言うと、瓶に入ったピンク色のスライムを指で示す。マリナを苦しめたあの触手に比べれば、むしろ可愛いとすら思える外見だった。

「なるほど、あなたの言い分は理解しました。しかし、やはりお母様一人をここに残すわけにはいきません。その施術が終わるまで、わたくしもこの部屋で待機させてもらいますわ、ギュネイ」

恐らくはアイシャに手を出そうと企んでるギュネイは、ここでもなにかしら虚言を弄

してマリナの監視を拒もうとするはず……という予測は、外れた。

「ええ、もちろんかまいません」

「えっ……い、いいのですか？」

「はい。ただ、アイシャ様が同意してくだされば、ですが」

「私がどうかしたのですか、ギユネイ？ それと、この格好はなんなのです、無礼にも程がありますよ？……あっ」

「お、お母様……！」

部屋に戻って来た母と長女は互いに気づき、大きく目を見開いた。

最初に目を逸らしたのは、娘の視線を全身に感じた、アイシャのほうだった。

（な、なぜ、どうしてここにマリナが？ あ、あなたですかギユネイ！）

娘とのまさかの対面ののち、アイシャが最初にしたのは、下着にも等しい施術用衣服を纏った己の肢体を手で隠すことだった。その次に、この状況を生み出したであろう魔術師を睨む。

「ああ、アイシャ様、ご用意が済んだようですね。……実は、マリナ様もこの施術に興味を持っていただけらしく、見学を、と。よろしいでしょうか？」

「マリナが？……え、ええ、私はいいいけれど……でも……その、少し恥ずかしいわ」
やんわりと娘の同席を拒む。

「それとこの服はなんなのです。もっとまともなものはないのですか、ギュネイ」
ギュネイから渡されたのは、純白のワンピース、あるいはスリッパを思わせる服だった。なにか特殊な素材で編まれてるらしく、いままで経験したことのない肌触りがある。

「申し訳ございません。施術に使うスライムは、一般的な衣服を嫌う性質を持っています、特別な素材で作ったものでないと近寄ろうとしないのです」

「だ、だからといってこれは……」

身体にぴったりフィットした服は、豊かなバストやくびれたウエストをより強調してしまう。また、裾が短いため、人妻らしい柔らかな太腿の大半も見えていた。

（透けてはないようだけれど、娘の前でこんな格好はつらすぎるわ）

ギュネイと二人きりならば恥ずかしいのも我慢するのに、などと考えてしまった己を戒めつつ、胸元を腕で隠し、裾を引っ張って少しでも太腿の露出面積を減らそうとする。

美しい人妻が乙女のように羞じらうそんな姿こそが、悪辣な男の欲情を刺激するのだと、アイシャは気づかない。

「本来は、全裸で施術するのが最も効果的なのです。実際、昨夜のレオン王は終始全裸でございました」

「お父様が全裸で、このベッドに……っ」

マリナがつぶやき、熱いまなざしをベッドに注ぐ。

「もちろん、さすがに全裸で、などとは申しません。……恥ずかしいのでしたら、今日のところはキャンセルされてももちろん構いません。レオン様には私のほうから説明いたしますので」

「え……」

ギユネイの提案に、アイシャは知らず、声を発していた。

「そもそも、アイシャ様ほど美しい方に美容は必要ありませんからね」

ギユネイからこうした言葉をかけられるのはいつものことだが、何度経験しても慣れることはない。

（ダメ、ダメよ。この男はいつも口先だけなのだから。どうせまたなにか企んでるに決まってるわ）

王妃としての理性が警告を発する裏で、アイシャの女の部分が歓喜する。

知らず淫らな期待をしていた熟れた女体が切なく疼き、露わに伸びた太腿を無意識に擦り合わせてしまう。

「……ねえ、ギュネイ。お父様はこの施術の効果を実感されたのですね？」

若い頃の自分によく似た娘が、なにかを覚悟したと思しき顔をギュネイに向けていた。母であるアイシャの胸に、言い様の不安がよぎる。

「はい。もちろん、レオン王も美しい方ですから、美容効果がどれほどあったかはわかりません。ただ、疲労物質を排除する効果か、身体が軽くなった、疲れがなくなつたと、ありがたいお言葉をちょうだいしました」

アイシャも、夫から同じことを聞かされていた。それを考えると、このスライムを使った美容術の効果はやはり高いのだろうと思う。

「わかりました。それならば、わたくしがお母様の代わりにあなたの施術を受けましょう。服をよこしなさい、ギュネイ」

「承知しました、マリナ様」

ギュネイは必要以上に深く腰を折ってから、棚から施術用の服を取り出す。今、アイシャが纏ってる服と同じものだった。

「マリナ、あなた」

「いいのですお母様。確かにその人間が言うとおり、お母様みたいに美しい方では、効果はわかりませんから。その点、わたくしならばいいデータがとれるでしょう。……そうですね、ギュネイ？」

挑みかかる、あるいはなにかを期待する、そんな口調に思えた。

「……」

ギュネイは無言でマリナに近づくと、背伸びをして、耳元でなにごとかを口にする。マリナにだけ聞こえるように言ったのか、あるいはぎりぎりこちらにも届くよう計算したのかはわからないが、アイシャの長い耳はしっかりとその言葉を捉えた。

「あなたはとても美しいです、マリナ様。あなたほど若さと美しさを兼ね備えた方を、このギュネイ、他には知りません」

若さ、という単語が妙に強く、深く、鋭く、耳と心に突き刺さった。そして、頬を赤らめた娘の顔に浮かんだ、隠しきれない優越感も。

（わ、私より美しい女などいないと、何度も何度も言ったのを忘れたのですか、ギュネイ！）

実の娘への嫉妬が、賢明な王妃から冷静な思考を奪っていた。

「ここで私が実験に協力することでああなたの研究に、ひいては我が国の未来に役立つのであれば、王妃として、拒むのは得策ではないでしょう。また、母親としても、娘にだけ労苦を負わせられません」

見え見えの言い訳を並べつつ、アイシャは自らベッドに横たわった。

「お、お母様には美容なんて必要ありませんわ。ここはわたくしだけで充分です」

「美容はともかく、疲れが取れるならいいかも、と思ったのよ。レオンもそう言っていたしね。私ももう、マリナと違って若くないのだから。ふふっ」

「……ギユネイ、それを寄こしなさい」

引ったくるようにしてギユネイの手から施術用の服を受け取ると、マリナは着替えるためにいったん部屋を出て行った。

「ねえギユネイ、私になにか言うことはありませんか？」

娘の足音が遠ざかるのを確認してから、アイシャは尋ねる。

「私が初めてそのお姿を見たときから、アイシャ様の美しさは増すばかりです。アイシャ様は今も昔もお美しく、お若いままです」

仰向けに横たわった王妃の傍らにやって来たギユネイはそう言って片膝を着くと、アイシャの手の甲にキスをした。

かさついた人間の唇の感触に、美貌の人妻エルフは、ベッドの上で小さく、艶めかしくその女体を震わせるのだった。

急いで着替えてきたのか、マリナはすぐに部屋に戻って来た。だが、ギユネイの前で立ったまま、なかなかベッドに上がろうとしない。

「あ、あまりじろじろ見ないでちょうだい。無礼ですわよ、ギユネイ」

セリフとは裏腹に、マリナは両手を後ろに回したまま、軽く胸を張ってたわわなバストや、すらりと伸びた長い脚をアピールしてくる。

（やはり、アイシャ様とよく似てらっしゃる。ただ胸のサイズは、マリナ様のほうが少し優ってるようですね）

先に横になっているアイシャの胸元をギユネイがちらりと見た瞬間、マリナの口元に小さな笑みが浮かぶ。そしてベッドに向かう途中、ギユネイの耳元で小声で囁いてくる。

「今、なにを比べたんのですの？」

さらに、ギユネイの横を通る際、豊かな胸を軽くぶつけてきた。

（おやおや、ずいぶんとアイシャ様に対してライバル心を燃やしてますね）

マリナが母親に対して屈折した想いを抱いてるのは知っていたが、どうやらギユネイが考えてる以上にそれは強いらしい。

（アイシャ様もマリナ様に対して思うところがあるようですし、これは、こちらの計画以上に愉しませてもらえそうです）

美しい母娘が並んで横たわるのを確認してから、ギユネイはピンク色のスライムを瓶から出した。

「このスライムはまず、人体の排泄物を溶かす分泌液を出します。その後、融解した排泄物を養分として取り込みますが、いずれの段階でも痛みなどはありませんので、ご安心ください。ただ、多少くすぐったいかもしれませんね。昨晚のレオン王も、慣れるまではベッドの上で転がってましたから」

「うふふ、そうね、あの人、くすぐったがりなもの」

「説明は理解しましたから、さっさと始めなさいな」

夫婦の話題に機嫌を害したマリナに促されるように、ギュネイは王妃と王女の半裸身にそれぞれスライムを放った。

「なにか問題があればすぐにおっしゃってください。すぐに中断しますので」

無駄に警戒されるとこの先の愉しみに支障が出るので、せいぜい殊勝な、鹿爪らしい顔をつくって下心がないとアピールしておくが、これまでがこれまでにだけに、どこまで効果があるかはギュネイにも読めない。

（お二人が揃ったときにどのような反応をされるのか、まだ未知数ですしね。先日、マリナ様とミリス様のようなになるのか、今から興味深いところですが）

美しい王女姉妹の乱れる姿を思い出し、ローブの中で凶悪な肉鉗がびくん、と跳ねる。

「いかがでしょうか」

男の両手で掬える程度の、あまり多くない量のスライムたちが、アイシャとマリナの肌をゆっくりと這い始める。

「た、確かにこれはくすぐったいわね」

「思ってたより悪くはないですが……ん……ぬるぬるがちょっと……あ……っ」

スライムは美母娘の肌を全身パックするように広がっていく。伸びたスライムの体組織越しに二人の肌が透けて見えるほどの薄さだ。

「ふむ。やはりレオン王のときとは若干、スライムの反応が異なりますね」

もっともらしいことを口にしつつ、観察という名目で母娘の肢体を視姦する。

「ン……あっ……えっ……くっ、ふうう……はっ、はっ、はぁ……っ」

「えっ……ちょっと……んふっ、んっ……なんですの、これは……あふ……う」

アイシャとマリナの漏らす声が変わったのは、ちょうどスライムが伸びきり、二人の身体をほぼ包み終わった頃だった。

「肌に吸いつく感覚が出てきた頃だと思いますが、これこそが、老廃物を除去し始めた証拠です。痛くはございませんか？」

「痛くは、ないけれど……んっ……く、くすぐったい、わ……あっ……アア」

「え、ええ、わたくしも、ちょっとくすぐったいくらい、ですわ……ふっ……んふっ」

ギユネイの説明に嘘はない。嘘はないのだが、二人に告げてない事実はいくつかあった。

まずこのスライムは、昨夜、レオンに使ったものとは別の種類になる。ギユネイが己の卑劣な計画のために、別途改良した特殊なスライムだった。

（こいつらは確かに生物の老廃物を摂取します。しかし同時に、催淫効果のある体液を肌から浸透させるよう、私が改良したのです）

スライムに仕込んだ媚薬も、ギユネイが調合し、魔力も込めた特別製だ。

ただし、あまりに早く効果が出ると二人に勘づかれてしまうため、遅効性にしてある。威力も抑えておいたが、これはアイシャとマリナを発情させるには、薬に頼らなくてもどうにかなるという、ギユネイの自信の表れだ。

（二体同時制御も、特に問題はないですね。これならもう一、二体増やしても大丈夫そうです）

レオンに施術したときと違い、今回、スライムはギユネイが魔法で操っていた。つまり、王妃と王女の半裸に近い女体を這う動きは、すべてギユネイの意図によるものだ。

（さりげなくお二人の感じるポイントをまさぐってるのですが、気に入ってもらえるようですねによりです）

本人以上に彼女たちの性感帯や急所を熟知してるギュネイに操られたスライムの動きは、まさに愛撫だった。

「ね、ねえギュネイ……こ、これ、その……少し……んふ……んんっ」

「ご安心ください、最初は気味が悪いかもかもしれませんが、すぐに慣れますので。もし、我慢できないほどの痛みがありましたらおっしゃってください」

「痛みでは、ないのだけれど……はっ……あっ……あふ……ウン」

二人の娘を産んだとはとても信じられないほど瑞々しいアイシャの肌が、徐々に赤みを帯びていく。それはまるで、スライムのピンクが移ったかのものであった。

（ふふふ、アイシャ様とは最近ご無沙汰でしたからね。そのせいでずいぶんと拗ねてらっしゃいましたし、お詫びに、あなたの感じるポイントを重点的に這わせましょう）

なにか言いたげな人妻の潤み始めた瞳を見つめながら、スライムに指示を出す。

「マリナ様はいかがでしょう？ 痛みなどはございせんか？」

さらに甘い声を漏らし始めたアイシャに背を向け、もう一人の美しい獲物の反応を観察する。

「あ、あなた、これ……ちょっとその……変なところに……アッ……はうウッ！」

娘もまた、母と同じくその白い肌を妖しく紅潮させていた。スライムに包まれた若

い女体が、ベッドの上で落ち着きなく左右に揺れる。仰向けのアイシャに対し、マリナは俯せで施術を受けていた。

「変なところ、とは？　もしかして……不浄の穴、でございますか？」

ギユネイは耳元に顔を寄せ、マリナにだけ届く小声で言う。

薄く伸びたスライムはマリナの臀部周辺にまで及んでいた。もちろん、そうさせてるのはギユネイである。

「っ！　や、やっぱりギユネイ、最初からそのつもりで……くひゅっ!？」

「どうかしたの、マリナっ」

「な、なんでもありません、お母様！　く、くすぐったくて、その、声が出てしまっただけですわ！」

気遣わしげな母に対し、マリナは明るい声で答える。

「そのように誤魔化すしかありませんね。まさか、母親の前で尻穴をほじられて感じてしまった、などとは言えないでしょうし」

先程よりもさらに耳に口を近づけたギユネイが、囁き声で憐れな第一王女の羞恥を煽る。

言葉責めするだけでなく、鋭敏な性感帯でもある長耳に軽く息を吹きかけ、マリナの中に生じた愉悦に油を注ぐ。

「くっ……おやめなさい、この……恥知らず……アア……そこは、そこは……あっ」
卑劣な魔術師によって望まぬ開花をしたアヌスに、ピンク色の軟体生物がじりじりと迫る。以前、ギユネイが使役した触手に比べればずっとソフトな動きだが、隣にアイシャがいるというシチュエーションに、マリナは全身に脂汗を浮かべる。

（どうですか、すぐ横に実の母親がいる状況で肛門を嬲られ、感じてしまうお気分
は？ 妹とはまた別の背徳感がありませんか？）

ギユネイは顔を上げ、二人を同時に観察、否、視姦できるポジションへと戻る。

（マリナ様の後ろの開発は、こちらの期待以上に進んでたようですね。あとは、アイシャ様の反応次第、ですか）

ギユネイは意識と魔力を二体のスライムに向け、それぞれに新たな指示を出す。

マリナを包むスライムには、引き続きアヌス周辺を中心にまさぐらせる。そしてアイシャの全身を這っているスライムには、これまで以上に露骨な性感帯責めを命じるのだった。

美容のためと称するいかげしい行為が始まってどれだけの時間が経っただろうか。
エルフ王国の誇る王妃と第一王女は、その美しい肢体をスライムまみれにしながら

身悶え続けていた。

(くっ……いつまで……いつまで続くのですか、これは……っ)

マリナは汗と涙で濡れた瞳で憎むべき仇敵を睨みつける。だが、その瞳は無慈悲に与えられた快楽によって蕩けてしまう。

「ふっ、ンッ……ンン……ンンンンッ！」

屈服の甘い声を、口を閉じて必死に堪える。

(ダメ、ダメよマリナ、堪えて……。肉欲に流されては、またこの男の思う壺です……)

スライムを操ってるのがギュネイなのは、もはや明白だった。そして、その狙いが自分たち母娘であることも。

(わたくしたち姉妹を辱めただけでは飽き足らず、今度はお母様まで一緒にだなんて……どこまで性根が腐ってるのですか、この人間は！)

気づけば、マリナもアイシャも全裸になっていた。どうやらスライムの分泌液で溶ける素材でできた服を渡されてたらしいと気づく。

剥き出しになった身体をギュネイの視線から隠すこともできないのがつらく、悔しく、恥ずかしい。スライムが半透明なのが恨めしかった。

(このスライム、さっきから妙にわたくしの下半身を……お、お尻の辺りをしつこく

狙ってる気が……)

ベッドの上で四つん這いになったマリナの腰がゆらゆらと左右に動く。

「ああっ……んふん、んああ……ね、ねえギユネイ、もう、もう充分よ……そろそろ終わりにしてちょうだい……あっ、んくっ……あはァ！」

スライム責めと同じくらいにマリナを苦しめてるのが、隣から聞こえてくるアイシヤの声だった。

(お母様もわたくし同様、感じさせられてるんだわ)

同じ女として、この快楽に抗うのが難しいのはわかる。理解できる。けれど、母の声に甘い響きがあることは、娘としては知りたくなかった。

ギユネイに中止を求める声にすら、どこか媚びが含まれてるように感じてしまう。

(やっぱり、お母様もギユネイに……わたくしと同じ目に……女の尊厳を踏みにじられてしまったのですね……)

アイシヤとギユネイの関係はすでに知っていた。知ってはいたが、こうして実際に生の反応に接すると、実の娘としてはたまらなくなつた。

「ご安心ください、アイシヤ様。もうまもなく終わりますので。あとは、身体で最も大量の老廃物がある器官を掃除すればスライムたちの仕事は完了します」

アイシヤに対するギユネイの返答を聞いて、マリナは総毛立った。この男の狙いを

理解してしまったからだ。

「ま、まさかあなた、まさか……あひいいっ！」

問い詰めようとしたマリナの口から、この日一番大きな声が出てしまった。ここまでは窄まりの周辺をいじるだけだったスライムが、ついにアヌスへの侵攻を開始したのだ。

（はううう、来てる、わたくしの恥ずかしい穴に、気持ち悪いものが勝手に入って来るう……アア、ゆ、許しませんわよギュネイ、何度も何度もわたくしにこんな破廉恥な真似をして……あっ、ダメ、いけません、それ以上は絶対にダメ……アアッ！）

「マリナ、マリナっ!? ギュネイ、娘にいったいなにをっほおおっ!?」

マリナよりもさらに大きな、そして卑猥な声を放ったのはアイシャだった。

「お母様になにを……はうん！ ま、また奥にい……くっ……ふうウッ！」

「お二人とも、どうか力を抜いてください。先程言いましたとおり、スライムたちは、最優先で老廃物を除去すべき場所に潜っただけなのです」

「はっ、はっ、はおおっ……無理よ……や、やめさせなさい、ギュネイ……こんな……こんな真似、許しません……ひっ、くひい……!!」

アイシャの激しい反応から、母はアヌス責めの経験がないのだとわかった。そして、初めて己の排泄器官を凌辱されたときの記憶が甦る。

（あのときのわたくしも、今のお母様のように必死に逃げようと思いました。でも、ギユネイはそれを許しませんでした。わたくしの恥ずかしいところを同時に黽って、浅ましく恥を掻かせたんです……っ）

アヌスを指でほじられながら、乳首やクリトリスをいじられ、無理矢理絶頂させられた苦い記憶とともに、甘い感覚も思い出してしまう。

（この男のことです、きっとお母様にも卑猥なことをするはずですわ）

四つん這いになった裸身を震わせつつ、母親の痴態を見る。

姉と言っても通用しそうな若々しい裸身が、ベッドの上で仰向けのまま震えていた。スライムがどのように蠢いてるかはわからないが、激しく跳ね上がる下半身を責められてるであろうことは容易に推察できる。

「あのときのマリナ様と同様に、アイシャ様のケツマ×コをはじりつつ、乳首とクリトリスをいじっております。……思い出されましたか、あのときの悦びを？」

小声で囁かれたセリフに、マリナが赤面する。

「誰が……誰が悦びなど……アッ、くっ、んうううっ……そ、それ以上先に進むのは、おやめなさい……あっ、あっ、い、いけません……そこは、違うのです……はっ、はあ、はああぁ……っ！」



侵入したスライムによって満たされた直腸から、禁断の愉悦が広がった。

初めていじられたときに比べて格段に鋭敏になった排泄器官が、王女に背徳の悦びを与える。

（隣にお母様がいるのに、こんな……ダメ、絶対にイッてはダメ……！ 醜い魔物に蹴られて、アナルで恥を搔くだなんて、王女として、絶対に許されません……！）

マリナは懸命に理性で抗うが、過去、こうした試みは一度たりとも成功しなかった。そして今夜もまた、美姫の抵抗は失敗に終わってしまう。それも、すぐ隣の実母と同時アクメという、最低最悪の結末で。

「イヤッ、イヤよギュネイ！ 許して、もう、許してっ！ せめて、せめて娘のいないところでえ……はあああつ、来るのよ、恥ずかしい波が来てるのお！ ダメ……ダメダメダメ……ダメ……ッ……!!」

（お母様……な、なんて声を……!?!）

それは初めて聞く母の、女の、牝の声だった。その衝撃は、妹のアクメ声を知ったときよりもずっと大きかった。

だが、ショックを受ける暇などなく、マリナ自身も牝の嬌声を母親の前で晒す恥辱を味わう。

「ひっ、ひううっ……お尻、お尻は許してえ……おっ、おっ、おふっ……イッ、イク

……おほお……おっほ……オオ……ッ!!」

ぬるぬるのスライムに腸襞を吸われながら、マリナはアナルアクメに随喜の涙をこぼすのだった。